



診療放射線技師がグローバルヘルスに貢献する： 医療技術等国際展開推進事業から見たこと

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター

国際医療協力局 展開支援課 光野 讓

診療放射線技師とグローバルヘルスの関わりは残念ながら薄い。現在は国際医療協力局で勤務している自分も、医療技術等国際展開推進事業に参加するまではグローバルヘルスは医師、看護師の分野という認識であり自分とは関係のない世界と思っていた。

ご存知ない方のために概要を説明する。

医療技術等国際展開推進事業は、国際的な課題、我が国の医療政策や社会保障制度等に見識を有する者、我が国の医療従事者や医療関連産業の技術者等を関係国へ派遣している。また諸外国から医療従事者や保健・医療関係者等を受け入れている。これらを通じて、我が国の公的医療保険制度等の日本の医療制度に関する経験の共有、医療技術の移転や高品質な日本の医薬品、医療機器の国際展開を推進し、日本の医療分野の成長を促進しつつ、相手国の公衆衛生水準及び医療水準の向上に貢献することで、国際社会における日本の信頼を高めることによって、日本及び途上国等の双方にとって、好循環をもたらすことを目的とする。

出典：国立研究開発法人 国立国際医療研究センター 国際医療協力局ホームページ



図1 サファリパークに靡くザンビア国旗

ザンビアでの事業)

そして我々診療放射線技師にもグローバルヘルスに貢献できる事を気づかせてくれたのは、「ザンビア共和国 CT画像診断及び血管造影技術強化事業」である。

ザンビア共和国と聞いてピンとこない方のために説明すると、同国はアフリカ南部の共和制国家である。かつてはイギリス領であり公用語は英語である。世界三大瀑布のヴィクトリアの滝が観光スポットとして有名である。東京からザンビアの首都ルサカまでは直線距離にして12917km、東京（成田）からルサカまでの飛行時間は22時間25分である。

キャノンメディカルシステムズ社製血管造影装置と同社製CT装置がザンビア共和国のザンビア大学附属教育病院（University Teaching Hospital：以下UTH）において2015年にザンビア側の予算で購入設置された。UTHは2016年から同機器を使用して医療活動を開始したが、これらの装置の基本的な使用方法や操作方法しか理解しておらず、有効利用されていなかった。

そのため2017年から3年間に本事業を通じ、CT画像診断装置の技術指導、CT画像読影診断、心臓血管カテーテル診断、治療に関し指導を行った。

2017年度CT画像診断技術向上支援)

UTH放射線診断部のザンビア人医師1名と診療放射線技師4名に対し研修を行った。

指導内容には、CT撮影プロトコルの見直し、被ばく線量管理、機器の品質管理、患者接遇が含まれる。これらのスキルを身につけた研修生達は、ザンビア国初となる心臓血管造影CT検査を成功させ、その模様はTV放送と新聞で報道された。その甲斐

あってUTHのCT検査室は臨床科や患者から信頼を獲得し、事業前1日40件だった検査数は、1日60件にまで増加した。波及効果は厚生省まで及び、機器購入以来念願であった装置メンテナンス契約が締結された。3年間機器保守管理の重要性を訴えていたNCGM診療放射線技師の熱意が実ったと思うと感慨深い。そのお陰で24時間365日機器稼働が可能になった。UTHでは、CT新規増設計画が浮上しており更なる展開が期待される。

更に心臓血管CTの需要が今後も増加することから、富士フィルム社製3D画像解析システムの新規購入にも漕ぎつけることも出来た。

2018-2019年度心臓血管造影技術強化支援)

UTH循環器科ザンビア人医師1名、看護師2名、診療放射線技師2名に対し研修を行った。

目的は、本事業以前に南アフリカ共和国まで行かなければ受けられなかった世界標準の心臓血管検査や治療が、地元UTHでも受けられるようにする事である。目的は概ね達成されたと安堵しながらUTHで研修指導をしていた時に、事業のインパクトを示唆する出来事が起きた。近代的な設備を誇る外資系民間病院から南アフリカ人患者が急性心筋梗塞治療目的で搬送されてきたのである。研修生達は、緊急対応にも臆することなく対処し治療を無事成功させた。付け加えると、途上国で民間病院から公共病院への患者搬送は考えられない事である。これを聞いたUTH院長は大変なご満悦であった事は言うまでもない。

手技の様子やインタビューはテレビや新聞でも大きく取り上げられた。ヒロインである循環器医師は地元ルサカっ子でもあり、国民の誇りや郷土愛醸成にも貢献できたと自負している。TV放送終了後、



図3 心臓血管検査の様子

この循環器医師は副大統領との会見を果たしている。ハンサムな副大統領との対面は嬉しかったらしく、スマホの待ち受け画面はいつの間にか副大統領に変わっていた。

アンギオで使用するカテーテルやステントは必須の消耗品である。研修生は日本製消耗品の高品質と使い易さを知っていたがそれまで入手ルートがザンビアにはなかった。そこでこの事業を契機に販売ルート開拓に一翼を担う事ができた。

最後に)

研修中は、師弟の関係であるが、研修生とは職場を離れば同業者であり分かり合うのに時間はかからなかった。UTHスタッフと出かけたサファリは非常に良い思い出である。(写真参照)



図2 サファリパークでの一コマ

事業終了後もUTH研修生と国立国際医療研究センター(以下NCGM)スタッフとの交流は続いておりお互いの貴重な財産になっている。更に、NCGMスタッフの仕事へのひた向きさに心を動かされたUTH所属の放射線技師の中には、大学院留学、大学進学を果たした者もいる。

非常に多くの経験を積むことができ人間的成長をさせていただいた本事業及び関係者に深謝申し上げます。



図4 日本チームから贈られた手作り模型